

Ⅲ 教え子からのメッセージ

1 宮里先生から学んだこと

—子どもも親もどちらも大切。それぞれを一人の人間として尊重しよう—

赤星裕美（2005年社会福祉学科卒業 合志福祉会さくらんぼ保育室）

宮里先生、ご退職おめでとうございます。

私は2005年度に社会福祉学部を卒業し、現在、合志市のさくらんぼ保育園・さくらんぼ保育室に保育士として勤務しております。卒業からかれこれ15年の月日が流れ、時の速さを感じるとともに、宮里先生が長年保育研究に携わられたことに尊敬の念を感じつつ、先生から学んだことが今の自分の保育にどう活かされているのか改めて振り返っています。

私が学園大に入学した動機は、「なんとなく子どもと関わる仕事がしたいな…」という程度の軽い気持ちで、正直なところ保育士に対してそれほど熱意を持っていたわけではありませんでした。保育士に対するイメージも「子どもと毎日遊んで楽しそう…」というくらいの曖昧なものでした。しかし、宮里先生の授業の中で、実際に子どもたちと関わりながら泥団子を作ったり、絵本の見せ語りをして実践レポートを書いたりして、保育士は子ども達の発達に深く関わっている仕事なのだと実感するようになりました。また、様々な保育実践事例の分析をする中で、保育者の関わり方一つで子どもたちが変わっていく様子を目の当たりにし、保育の奥深さ、保育の素晴らしさに感銘を受け、「この仕事をやりたい…」と真剣に考えるようになりました。宮里先生との出会いがなければ、保育士としての今はないと言っても過言ではありません。

3年時の宮里ゼミでは、保護者への子育てレポートを通して、子育ての素晴らしさを感じる共に子育ての大変さや辛さも学び、「子育てには誰かのサ

ポートが必要不可欠なのだ」と強く実感しました。さらに、ゼミの仲間と共に虐待問題の事例検討等も行い、現代の保護者を取りまく社会状況についても考察しました。そして、このゼミでの学びをきっかけに、虐待問題についてもっと研究したいと考え、宮里先生に卒業論文の担当になって頂くことをお願いしに行きました。様々な研究や授業で忙しい中、快く引き受けていただいた事を今でも覚えています。

卒論での1年間は「虐待における親子分離と親子再統合」をテーマに、虐待問題を通して、子どもへの関わり方だけではなく保護者支援のあり方を深く考えさせられました。それまでは虐待問題を「虐待する親から如何にして子どもを守るか」という視点でしか捉えていませんでしたが、研究を重ねる中で「虐待する親にはそうせざるをえない背景がある。親の支援なしには虐待問題は解決しないのだ…」という事を学びました。この学びは、私が保育士として保護者と関わる中でも大きな影響をもたらしているように思います。

卒業してからの保育現場では、様々な困難さを抱えた子どもや保護者に多く出会いました。家庭での問題が子どもに影響していることも多々あり、対応に悩んだことも数知れません。時には、無理難題を言われたり、辛辣な言葉をかけられたりしたこともありましたが、そのたびに「親には親なりの背景がある。それをしっかり受け止めよう…。指導ではなく一緒に問題を考えていこう」という姿勢で保護者と向き合ってきました。そのような姿勢で関わっていくと、保護者の態度も少しずつ和らぎ、心を開いてくれることを多く経験しました。親を指導するのではなく、様々な背景を持った一人の人間として尊重し共に問題を考えていこうとする姿勢が、親との関係づくりにおいて大切なのだと思います。

卒業して何年かたち、宮里先生とお会いする機会があり、その時に「あなたは、保護者さんのことを何と呼んでいる？」と尋ねられたことがありました。私は、「〇〇さん、と名字で呼んでいます」と答えました。すると、先生は「それは、すごくいいよ！保育現場では、親を『〇〇君のお母さん』と

呼ぶことが多いけど、それって親の事を、子どもを通してしか見ていないんだよね。親を一人の人間として尊重して、対等・平等な関係にあることが親との関係づくりですごく大事だと思う。それにはまず、『お母さん』ではなく、苗字で呼ぶことからだよね」とおっしゃっていました。「保護者をどう呼ぶか…」それまではあまり意識したことはありませんでしたが、「親を一人の人間として尊重する…」という視点に立つと、本当に大切なことだと気付きました。宮里先生から教えていただいた事は、今も自分の中でしっかりと息づき、日々の保育に活かされています。

保育者として、何年仕事を重ねてきても、未だに反省の毎日で、理想と現実の差に悩むことも多々あり、時にはこの仕事から離れたと思うこともしばしばあります。しかし、逃げずに、ここまで続けてくることができたのは、大学時代、宮里先生に学び、こうありたいと思い描いた保育士像に、少しでも近づいていきたいという思いが、自分の指針になり、頑張る力の源になったからだと思います。自分の保育の方向性が見えなくなった時は、今でも学生時代に宮里先生の授業で使っていた資料やノート・本を開き、見返ししながら、自分の原点に立ち返っています。

これからも、保育をするうえで、迷い、悩むことはたくさんあると思いますが、先生から学んだことを胸に、糧としながら、日々精進していきたいと思っています。

今後は、大学での保育研究の第一線からは離れられることと思いますが、まだまだ先生の研究を必要としている保育者は全国に多くいると思います。もちろん私もその一人です。悩んだときは、また、先生に相談しにいききたいと思っていますので、今後ともよろしくお願いいたします！しかし、まずは、ご家族の皆様とゆっくり過ごされてくださいね。

最後に、先生のご健康とご多幸をお祈りし、お礼のメッセージと変えさせて頂きます。本当にありがとうございました。

2 宮里先生から引き継ぐ研究

ーソーシャルワークの視点を生かした保育実践研究

上原 真幸（2005年社会福祉学科卒、熊本学園大学社会福祉学部子ども家庭福祉学科教員）

宮里先生、熊本学園大学における32年間の教員生活お疲れ様でした。保育の研究者として育てていただいた教え子の一人として、先生から引き継いでいきたい研究について記したいと思います。

①保育者から学び保育者に返していく研究

宮里先生の研究スタイルの柱に「実践的保育研究」があります。学部当時から、保育問題研究会や保育団体合同研究会に参加すること、そして、いい実践記録をたくさん読んで学ぶことの大切さを伝えてくださいました。

保育は実践があってこそそのものです。保育者から学び知ること、今日の保育に関する問題や、子どもたちの姿、家庭の姿が見えてきます。多様な状況に、真っ先に最前線に対応しているのは、保育者と言えます。保育者がどのように悩み考え、それを研究者として客観的に理解し研究的に考えること、その考えを保育者に返し再び保育者と共に考えることが実践的保育研究者の役割だと、先生の姿から学び続けています。

私自身、2017年から九州合研の「保育計画と園の行事」の分科会運営委員を担当させていただいています。また、熊本の一保育研究者として、ようやく熊本保問研にも入りました。双方共に先生がこれまで中心になって担われた、保育者も保護者も研究者も対等平等の研究会です。保育の仲間から学び一緒に考え、少し研究的な視点で言葉を理論化し伝え返す。保育仲間の中で、実践的保育研究者としての立場を私も維持しつづけたと思います。

②ソーシャルワークの視点をふまえた保育の研究

学部3年次の宮里ゼミでの学びは、私が児童虐待問題への関心を高め、卒業論文や修士論文の執筆、研究者を目指す道につながりました。

宮里先生からは、虐待問題をきっかけとし、子どもだけでなく保護者や家庭の背景に目を向けて考える必要性を強く教わりました。乳児院や児童養護

施設のファミリーソーシャルワークの考えを参考に、親子関係に歪みが生じている家庭に対し、関係の構築・修復を図るには保育者がどう関わるることができるのか。子どもを守ろうとするがために、保護者と対立するのではなく、保護者を支えることが、ゆくゆくは親子を共に支えることになるという視点です。その視点は虐待問題に限らず、障害など特別な支援を必要とする子どもの家庭や、貧困家庭等への支援にも通じます。

宮里先生は、保育所に社会福祉士が必要であることを主張されてきました。保育は福祉分野の一領域です。けれども、就学前教育や幼児教育という言葉のなかで、福祉の機能理解が薄れていることや、ケアワーカーとして日中に子どもに関わる役割が中心となりすぎて、ソーシャルワークの視点が欠けてしまうことがあります。保育を通して見えてくる家庭の生活問題に目を向け、地域の社会資源と家庭を結びつける支援は、子どもが就学前施設を卒園した後も、家庭の自己解決能力の育ちにつながります。保育の場で培われてきた保育実践を、ソーシャルワークの視点から捉え検討する姿勢は、私の研究の中心として今後も位置付けていくつもりです。

③学び続けることができる保育者の養成

保育者養成校に所属する研究者として、宮里先生から引き継ぐべき大きなものの一つに「場面記録」があります。対応に戸惑った場面等、会話や思いも含め記録に起こすものです。保育の記録としてはもちろん、園内研修などにも活用されています。

養成校の実習事後指導に場面記録を活用しているところも複数あります。全国保育士養成校協議会の2020年度セミナーでは、場面記録を実習事後指導に取り入れている九州内の6校の教員8名が集まり、研究発表を行いました。学生が実習後に書いた場面記録を活用し、どのような場面で戸惑いを感じたのかを分類・分析し、その結果を報告しました。今後は、記録内容の細部に着目し、学生がどのように対応しようとしたのか等を把握し、実習指導に生かせるよう試みています。

また、この場面記録には学生の思いや戸惑いが記載されるため、時系列の

みの実習日誌ではなく、場面記録を実習日誌に活用することで、実習施設の指導者と実習生とのコミュニケーションにも活用できるのではないかと考えています。更には保育者養成に求められる子ども理解や実践力養成につながる可能性がある、同メンバーで検討を続けています。

保育には正解もなければ100点満点もありません。場面記録を用いた保育の振り返りは、自分の保育力に満足しすぎず、より良い保育を求めていくことにつながります。保育問題研究大会等では、場面記録をベースに実践記録を作り、分科会で報告し他の保育仲間から意見をもらい翌日からの保育に活かす流れを築いている園の方々に会います。先生が作られた場面記録を、今後も本学で保育者として育っていく学生に伝えていきます。自分の保育を振り返り、他人の保育に刺激を受けられる、時には保育を変えることができる、そのような学びつづける保育者の養成を引き継ぎたいと思います。

学部生当時から現在も尚、恩師として先生から教わり続けています。引き継ぐことはもちろんですが、何よりも私自身は今後も先生と一緒に保育を考え続けたいと思っています。また、私自身の人生最大の目標の一つとして、先生と共著を出すことがあります。その目標に達成するにはあと何年必要かわかりません。今後も叱咤激励し続けてくださることを心から願っています。際限のない感謝の気持ちと共に、先生の今後も続くご活躍を祈念し、退職へのお祝いの言葉とさせていただきます。

3 六郎先生へ—いつか『ミニ宮里』から芽を出し花を咲かせたい！

大堂知佳（2011年子ども家庭福祉学科卒業）

六郎先生、長い間本当にお疲れ様でした。

私は高校3年生の時、オープンキャンパスで先生の模擬講義を聞いて入学を決めました。そして六郎先生のゼミに入り、どっぴりと先生にはまってしまった1人です。

六郎先生には在学中からお世話になりっぱなしでした。私たちの代のゼミ

生は よく飲み よく語り よく泣く人たちで、保育のことだけでなく恋愛の話まで、先生のお部屋でも飲みの中でも本当によく熱く語り合いました。4年生の夏に皆で行った滋賀の保問研夏季セミナーで、夜ホテルの部屋で泣きながら熱く語る私たちに、その日に初めて出会った他大学の先生はびっくりしていました。こんな私たちに先生も大変だっただろうなと思います。でもそんな私たちにも先生はいつも優しく付き合ってくださいました。あの時間は大学時代の本当に貴重でかけがえのないものです。

卒業して、保育園に勤めてからも私は何かとグチグチと悩み、しまいには保育士には向いてないと言って先生を困らせていました。保育のことで相談しておきながら、先生のアドバイスに「でもでも」と生意気に口応えするような私だったのに、見捨てずにいて下さり本当にありがとうございました。いつまでも先生から卒業できないなあーと自覚しつつ、先生の存在に頼りっぱなしでした。

今は保育から離れて女の子3人の子育てにてんてこ舞いです。でも先生が結婚式で言って下さった「保育に戻る決意と見通しを失わず」という言葉を胸に、いつか保育の世界に戻るつもりです。現場にはいないのに保育は語りたい私は保育が好きなんだなあをつくづく思います。それも全て、先生のもとで育んだものです。保育の場にはいないことに少しうしろめたさを感じています。でも社会福祉士の資格も取得したし、子育ての経験も活かしたいし、やっぱり「保護者の味方になれる保育者」になりたいです。

卒業の時にたてた「いつか『ミニ宮里』から芽を出し花を咲かせる」という目標に向かって頑張ろうと思います。また現場の話と先生と語り合えるのを楽しみにしています。本当に長い間お疲れ様でした。そして本当にありがとうございました。